

**前期：キリスト教思想と宗教哲学**

オリエンテーション——宗教哲学とその基本問題

1. 宗教哲学の歴史と伝統
2. 理性と啓示
3. 悪と神義論 5/1
- (4. 予定と自由意志)
5. 形而上学と神 5/15
6. シュライアマハー 5/22
7. トレルチ 5/29
8. ティリッヒ 6/5
9. ブーバー 6/12
10. 波多野精一 6/19
11. リクール 6/26
12. 研究発表1 7/3
13. 研究発表2 7/10
14. 研究発表3 7/17
15. 予備日 7/24

**<前回>宗教哲学の歴史と伝統**

1. 西谷啓治「宗教哲学——研究入門」(1949年)(『西谷啓治著作集 第六巻』創文社)
2. John H. Hick, *Philosophy of Religion*, Fourth Edition, Prentice Hall, 1990(1963).

Chapter 1: The Judaic-Christian Concept of God

Chapter 2: Arguments for the Existence of God

Chapter 3: Arguments Against the Existence of God

Chapter 4: The Problem of Evil

Chapter 5: Revelation and Faith:

Chapter 6: Evidentialism, Foundationalism, and Rational Belief

Chapter 7: Problems of Religious Language

Chapter 8: The Problem of Verification

Chapter 9: The Conflicting Truth Claims of Different Religions

Chapter 10:

Chapter 11:

3. Philip L. Quinn and Charles Taliaferro (eds.),

A Companion to Philosophy of Religion (Blackwell Companions to Philosophy),  
Blackwell, 1997.

4. 日本における英語圏の宗教哲学を視野に入れた研究。

- ・小山宙丸、田丸徳善、峰島旭雄編『宗教の哲学』北樹出版、1989年。

- ・間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993年。

- ・星川啓慈『宗教の〈他〉なるもの——言語とリアリティをめぐる考察』春秋社、2011年。

**2. 理性と啓示**

1. 宗教的認識論

認識の秩序と存在の秩序、循環。循環のどこから議論を始めるか。

2. 宗教→啓示という源泉（言葉・聖書）

認識→感性・理性の能力

キリスト教神学における両者の接点としてのロゴス：啓示にして理性

しかし、ここに緊張が存在する。 → キリスト両性論という解決

神学的には、認識論はキリスト論  
における根拠が問題となる。

**(1) 宗教的真理とはいかなる形態の真理か**

3. 啓示と信仰：経験における相関性

4. 啓示に対する「命題的な理解」（ヒック、1994、120）

「啓示内容は言明なり命題なりの中で表現された一群の真理である。啓示は神的に認証された真理を人間に伝えたものである。」

↓

信仰はこの命題の理解に基づく受容である。

「神的に啓示されたこれらの真理は、人間が従順に受け入れなければならないものだ、とする信仰の見方」、啓示内容が「真であると知的に同意すること」。

5. 「宗教的真理の心的な公布が啓示であり、これらの真理を従順に受け入れることが信仰である。」

cf. 「信仰＝意志」論、「信仰＝感情」論

Q：ティリッヒの「究極的関心」とはこうした文脈でどのような意味をもつか。（→木1の講義）

6. 20世紀前半の思想世界における「認識の存在論」の試み。

認識論から存在論への転換

たとえば、「命題的真理と出会いとしての真理」（E・ブルンナー）

7. 聖書の真理理解

「われわれは、主観と客観の対立図式によって規定されている一般の合理的な真理理解と対照させて、聖書の真理理解を際立たせる」、「神は、言においてご自身を啓示し、言によって世を造り、保ち給う。神学の課題は、かかる形式的な概念を際立たせ、これを啓示史の中心的内容と関係づけることにより、「構造」と「事柄そのもの」とが相互に規定し合っているさまを明らかにすることにある。」(97)

「旧新約聖書の啓示は、神の人間に対する関係と、人間の神に対する関係を問題にしている」、「イエス・キリストにおいて、「人間への神」と「神からの人間」の双方が啓示されている。」(98)

8. 神の人間との関係の出来事について

「神と人間との関係という出来事において、啓示はそれ自身決定的な契機であり、この出来事と分かちがたく結びついている。」(101)

9. 支配と交わり

「聖書の中心問題でありその使信全体を貫く唯一の主題である神人関係は、支配と交わりという二つの語で表わされる。」(105)

「主たらんとする神の意志が被造者における神の自己主張であるとすれば、交わりへの意志としての神の愛は、被造者への無制約的な自己贈与である。」(109)

**(2) 宗教と合理性**

10. 宗教的認識あるいはその真理は「合理的」か。

信仰は迷信か？ 宗教と科学は対立するか？

11. 合理性の一元論（狭い合理性）から合理性の多元論、コミュニケーション合理性へ  
論理実証主義 言語ゲーム論
12. 対立図式：双子のドクマティズム、あるいは原理主義的自己絶対化  
科学こそが合理性の典型であり、その対極にある宗教には一切の合理性は認められない（ドーキンス）。  
無神論的原理主義：科学（＝無神論）のみが合理的であり宗教はまったくの妄想である。  
創造論者：創造論こそが真の科学であり進化論は偽りの科学である。
13. 無神論的自然主義  
「科学的探究は、実在的なものについての真理に至る唯一の適切な道を提示しており、その結果、宗教的であろうと形而上学的であろうと、経験科学が提供する根拠以外に基づく命題はすべて単なる〈主観的な〉ものであるということになる。……科学的主張と宗教的主張とは同等であって、それゆえ競合するという見解は（ほとんどの科学的集団やいくつかの他の集団では、前者が真であり、後者は偽である）、創造論者によっても共有されている。もちろん、創造論者にとっては、創造についての宗教的教説が真であり、それに相当する現代科学の宇宙論は偽である。」（Gilkey, 1993, 54）
14. 合理性はいかなる概念か。メタ概念としての合理性。  
人間が経験する世界は単一内容の合理性において理解できるものではない。事実として多様な経験の仕方が存在し、この多様な仕方に即した合理性概念が求められるべきである。しかし、合理性は多様な形態について共有に使用できる。  
rationality と reasonableness。  
John Locke, *The Reasonableness of Christianity*, Clarendon Press, 1999.
15. ヒック：世界についての複数の経験可能性（＝宇宙の両義性）、宗教と自然主義。  
「今日世界が有神論的と自然主義的あるいは無神論的に経験されているということは明らかな事実であり、だれも異議を唱えようとはしない。しかしながら、これらの異なった経験様態が同様に合理的に擁護可能であるかと尋ねるときに、議論が生じるのである」（Hick, 1989, 74）、「我々は様々な結論に至った。いくつかのものは有神論的結論を支持するが、しかし決定的な仕方においては、しかしほかのものは無神論的結論を支持する。しかし、これもまた決定的な仕方ではない。我々が考察した宇宙のそれぞれの局面は有神論的解釈と自然主義的解釈の双方が可能であることがわかる。」（ibid., 122）
16. 神の存在論証とは何だったのか、何なのか。  
いわゆる「論証」を意図したものではない。プランティンガ（分析的有神論・分析的神学。）  
「それゆえ、アンセルムスの存在論証のこれらの再定式化された諸改訂版についての我々の判断は、次のようにならざるを得ない。おそらく、それらはその結論を論証あるいは確立したと言うことはできない。しかし、それらの中心的前提を受け入れることは合理的であるのだから、それらはその結論を受け入れることが合理的であることを示しているのである。おそらく、このことがこの種のどんな論証に対しても期待できるすべてなのである。」（Planting, 1974, 221）
17. 合理性概念の批判的検討：クリフォードの「証拠主義的合理性概念」  
「一九世紀の懐疑主義者クリフォード（W. K. Clifford）は、次のように述べたものである。『不十分な証拠をもとにして何かを信じることは、いつでも、どこでも、誰に対しても間違っている』。クリフォードは、証拠（evidence）というものについて論じた。しかしながら彼の議論は、合理的信念の基盤としては狭過ぎるということが、直ちに明らかになる。……たとえば私が自分の目の前に手をかかっているとすれば、このとき私が自分の手

を見ていると信じることは適切であり、合理的であり、正当化することのできるものである。しかし、私はこのことを証拠の基盤にもとづいて信じているのであろうか。明らかに『否』である。この場合の証拠とは何であろうか。」(ヒック、1994、152-153)

18. 双子のドグマティズムは証拠主義的合理性概念に依拠しており、ここに問題がある。「合理的にものを信じるということは、経験のうちに適切に根拠づけられてはいるが、しかし言葉の普通の意味での『証拠』には基礎づけられていないのである。また、ここには推理によって架橋すべき前提と結論とのあいだの溝もないのであるから、いかなる推論も論証も含まれてはいないのである。」(同書、154)

19. 宗教哲学の課題：無神論的自然主義が要求するような論理レベルでの証拠主義的合理性という強力な議論をめざすのではなく、むしろ、経験の複数性、あるいは合理性の具体化についての複数性を認める、いわば柔軟な合理性へと合理性概念を拡張すること。

- ・後期ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論

- ・自己論から合理性概念へ：自律的自己を構成する物語性に注目することによって、物語という行為における自己同一性(物語的自己同一性)と他者への伝達可能性との双方を確保する。「物語」「物語る行為」が、自己を構成する働きをすると同時に、コミュニケーションの場を形成する。証言(証し)。

↓

コミュニケーション合理性

20. 現代神学における合理性の問題。

カール・バルト『アンセルムス書』(「信仰の合理性(ratio)」として論じられ、『教会教義学』において展開された「神の言葉の神学」とトランスのバルト解釈。

## <文献>

1. John Hich, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989
2. ジョン・ヒック『宗教の哲学』間瀬啓允、稲垣久和訳、勁草書房、1994年。(John H. Hick, *Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1990.)
3. Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon Press, 1974.
4. E・ブルンナー『出会いとしての真理』教文館/国際基督教大学出版局、2006年。
5. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。
6. Ian G. Barbour, *Religion and Science. Historical and Contemporary Issues*. A Revised and Expanded Edition of *Religion in an Age of Science*, HaperSanFrancisco, 1997.
7. Keith E. Yandell, "Protestant Theology and Natural Science in the Twentieth Century," in: D.C.リンドバーグ/R.L.ナンバーズ編『神と自然——歴史における科学とキリスト教』渡辺正雄監訳、みすず書房、1994年。(David C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.), *God & Nature. Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, University of California Press, 1986, pp.448-471.)
8. リチャード・ドーキンス『神は妄想である——宗教との決別』垂水雄二訳、早川書房、2007年。(Richard Dawkins, *THE GOD DELUSION*, Houghton Mifflin, 2006.)
9. A. E. マクグラス& J. C. マクグラス『神は妄想か?——無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』教文館、2012年。(Alister McGrath and Joanna Collicutt McGrath, *The Dawkins Delusion? Atheist Fundamentalism and the Denial of the Divine*, InterVarsity Press, 2007.)
10. Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress Press, 1993, p.54.